

ポスター発表「新しいなかま チョコちゃんとの生活」

～小さな学級の飼育活動～

高田 敬子



はじめに

昨年度行った、長野市立信州新町小学校一年生12名とうさぎの飼育活動の実践です。全校児童は100名弱で、半数はバス通学で通っている山あいの小さな小学校です。山には狸・熊・狐などの野生動物が生息していることや、自力で休日のえさやり当番などに来ることが難しい状況などから、これまで本校には飼育活動の伝統がありませんでした。外で飼うには危険がいっぱい、飼育の予算がない、そもそも動物がない、知識もない…そんな、ないないづくしから始まった飼育活動。不安でいっぱいでしたが、「できないからやらないのではなく、飼育活動は学級経営そのものにつながる。ゼロからのこの場所で、このクラスでしかできないことをやってみたい」との思いからスタートしました。



1 事前準備として

- ① 飼育を通して何を学ばせたいのかの明確化
- ② アレルギーの有無の確認
- ③ 子ども達との話し合い
- ④ 保護者への理解と協力の要請
- ⑤ 学校職員と児童への理解と周知
- ⑥ うさぎの入手方法
- ⑦ 何処で飼育するか
- ⑧ 休日の飼育はどうするか
- ⑨ えさ代の確保
- ⑩ 飼育期間の決定



これらをもとに、自分なりの飼育活動イメージマップを作成し、活動を開始しました。



ハローアニマルの講座

2 支援のパイプを強くする

日々の活動を成立させるためには保護者の協力が必要不可欠です。また、飼育に対する正しい知識を得るために、動物愛護センターへの協力依頼を行い、うさぎの特性

や飼い方のポイントなどを教えていただきました。また、地元の獣医さんを紹介していただき、いざという時のつながりを持つことができました。学校に出向いて雌雄判別もしてもらいました。えさ代を確保するために始めたジャンボかぼちゃの栽培活動では、地域ボランティアの方々と農業普及センターへの協力依頼を行いました。12名の飼育では心細いところを、

専門的な知識と心強い支援のおかげで、安心して飼育活動に踏み切っていくことができました。

3 飼育活動を行った良さ

(1) 責任感が生まれた

まず、毎日のお世話の責任者を決めました。

○当番は一人制・・・友達任せにしない自分の仕事に責任を持つ。

○一日交替制・・・日直当番を兼ねて行う。

○時間を確保する・・・えさやり・清掃・ふりかえりを時間割の中に組み込み、日課とする。

結果、どの子どもも忘れずに仕事をする事ができ、子ども達を誉める機会が増えました。

(2) 生活にリズムがついた



特に1年生にとっては、学校に来たら何を行うのか等、ルールの浸透やパターン化はとても大切になってきます。当番の子は、朝登校したらえさやり→休み時間は遊ぶ→清掃の時間は小屋掃除と飼育日記への記入→帰りの会で発表という流れで行いました。またその他の子ども達は、清掃のあとに草を1本あげる→担任の読み聞かせ→ドリル学習→5校時というように活動を定めることで、生活



にリズムがつき、時間を意識して行動できるようになりました。

(3) 話し合い活動の成立

学級活動として、チョコちゃんとの生活においていろいろな話し合いを行ってきました。名前を決める時は20個以上も候補が上がり、自分の意見を次々と言い出したり、自分の希望が通らないと涙を流したりする子もいました。そこで決まったのが話し合いのルールです。

- ①最後まで友達の話聞くこと
- ②発言は手を挙げること
- ③一人ずつ話すこと
- ④必ず話し合いに参加すること
- ⑤決まったことはみんなで守ること



秋にはチョコちゃんが噛みついたり暴れたりするようになってしまい、けがをしたりだっこすらできなくなってしまったりして、チョコちゃんとの距離が遠くなりかけた時がありました。「チョコちゃんが逃げるのに追いかけて抱こうとしている」「えさやりを好きな時間にやっている学年がある」「広いところに出られないからストレスがたまっているのではないかな」など、色々な問題点が挙がり、えさやりや抱きか

たの約束をもう一度全校に呼びかけようとポスターを作り掲示しました。また、噛みつくから怖いといって抱っこできない子も大勢いたので、自分たちも正しい抱っこの仕方をもう一度練習しようという学び直しの学習が始まりました。日常の問題点は、実態の把握→話し合い→対象の見直しというように、話し合い活動の定着・ルール化をはかり、皆で問題を共有してクラス全

目を隠してやるとおとなしくなるよ

体で考えていくことができました。

(4) 合科的な学習の展開

飼育だけに重点が置かれ活動がマンネリ化してしまうなどの日々の壁を乗り越えられるよう、教科学習とからめながら学習に変化を持たせ、年間を通して楽しく飼育活動できるように工夫することを心がけました。結果として生活科だけにとらわれることなく、各教科の学習の要素や良さも取り入れていくことができました。



あさがおの種を自分のおへそで温めて発芽させた子ども達は、種が生きている事を実感し、どんな小さなものにも命があることを学びました。チョコちゃんにえさをあげようと手を伸ばすとかみつくようになってしまったのは、十分な遊び場がないからストレスがたまっているのではないかと考えた子ども達は、毎日広いところに出してあげたり、チョコちゃんをもっと楽しくなるようにと遊び場を作りました。えさ代や活動費が無かったため、地域ボランティアの方々の指導や協力のもとに、春からジャンボかぼちゃを栽培しました。販売活動では 8700 円の収入を得ることができまし

た。ジャンボかぼちゃコンクールでは優良賞を獲得することができ、これもまた良い経験となりました。

○命の学習 「たねのおかあさんになりたいな」



○園生が「遊び場を作る」

S 男

たねがとどいたよ
おなかであつためたよ
アイスたべたかったけど
さむくなるからやめたよあつた
めたよ
アイスたべたかったけど
さむくなるからやめたよ



○ジャンボかぼちゃの栽培活動



